

3. 映画

〈第 55 回例会〉

ポーランド現代映画セレクション 2004-2009

「大成功」の達成感 振り返れば素敵な日々 ～激動の4ヵ月と3日間～

実行委員長 佐光 伸一

いきさつ 一研究者にすぎない私が実行委員長の重任を与えられたのは、ポーランド留学経験を持ち北海道ポーランド文化協会(以下ポ文協)の事務局を担当していて、同時に札幌映画サークル(以下映サ)会員でもあるという立場による。昨 2010 年 12 月に東京でポーランド映画祭があり、その少し前に作品の上映権を持つ大使館の一等書記官で、留学時代からの友人であるラドスワフ・ティンキェヴィチ(以下ラデック)さんから私に情報が入った。同じ映サ会員でポ文協事務局の氏間多伊子さんを通じて映サに伝えると、すぐ1月に実行委がスタートした。あとは当日まで連絡・交渉・会議・作業などあらゆる準備に忙殺された。

ロドヴィッチ駐日ポーランド大使の夫のドキュメンタリー映画監督ヴァルデマル・チェホフスキ(以下ヴァルデック)氏が行く、ワークショップ(以下WS)を開いてもいいという話が4月になって“降って湧いた”。連絡したら、なんと福島で撮影中。WSでそれを披露してほしいと新たに交渉し、決まったのは上映会1週間前だった。

2011年4月14日(木)監督来道 監督は新千歳に9時半に到着、早朝の出立にもかかわらず映サ岩本さんの車で精力的に動き回った。最初は札幌市こどもの劇場やまびこ座で人形浄瑠璃を見学、矢吹英孝館長自ら演じてくれた「三番叟」をビデオに収め、和太鼓の響きに大感激。ランチは円山の和カフェ SALON de Mu-Ya。円山マダムの隠れ家的なお店で、風流を解さない筆者には場違いだったが、たまたま開かれていた茶道教室の先生が抹茶をたててください。そのたたずまい、所作の美しいこと。カメラを回す監督だけでなく同行者一同、時の経つのを忘れた。次は江別の「ドラマシアターども」へ移動。監督は昨年訪れており、当協会副会長の霜田千代磨さん、オーナーご夫妻、喫茶店のお客さんなどと再会を喜ぶ。監督が震災後の東北を収めた未完成作品『災い—FUKUSHIMA の悲劇』に墨書し、これも撮影。監督の一連の行動はすべて即興で、そのひらめきと即応力に驚き、自分の頭の固さを痛感した。

15日(金)は芸術の森美術館へ。ガラス工芸、陶芸品に監督は夢中。展示会はパスし墨絵アニメ制作

の横須賀令子さんの自宅兼アトリエへ。彼女の作品『GAKI 琵琶法師』に興奮した監督は比喩を駆使し非常に哲学的なコメントを連発。墨絵アニメの制作現場は監督も創作者として大きな刺激を受けたようだ。

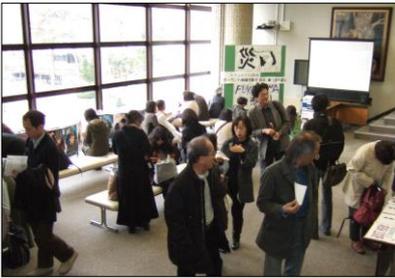
次はクレイアニメのキュウイフィルムスタジオへ。制作者の斎藤栄子さん、岩澤奈美子さんが実際にセットを組み、人形を動かし、コンピュータ上のプログラムでそれを動かす様子を見学。突然、監督は若いお二人にインタビューを申し入れ、斎藤さんの愛車、ミニクーパーに通訳の私を含む4人が乗って撮影は30分におよんだ。

WS会場の「かでの2・7」に着いたのは開始 17:30 の直前。告知期間が短く参加者がいるか心配だったが、幸い道新夕刊で紹介されたせいにか40名近くが集まった。被災地 20カ所6時間の撮影直後の『災い』を鑑賞し監督との討論に移る。「被災地でシャッターを切るタイミングが分からない」という若いカメラマンの戸惑いには「ドキュメンタリー作家の使命はまず記録すること。思考は後からついて来る」と明快だ。彼の長編『ヴィンツェンスの足跡を追って』を上映後、「小さな祖国」という言葉をキーワードに民族に関する討論が行われた。筆者を含め日本人の大部分にはいまひとつピンと来なかったが、それこそ異文化に触れる充実した時間だった。

16日(土)映画祭開幕 最初の作品『ぜったいにダメ!』の上映後、大使館のラデックさん=写真右=が到着。ラデックさん、ヴァルデックさんの挨拶に続き『裏面』を上映。一番にプッシュして来た作品で、入りも一番だった。ホワイエではヴァルデックさんの『災い』を常時上映=写真次ページ=。ショッキングな報道映像に比べ少し退屈に感じていたが、モギリしながら何度も繰り返し見るうち「日常の中に起こった非日常」という人間に寄り添った監督の視点が深く理解できた。

1日目の終了後、ポーランド大使館主催のレセプションが全日空ホテルで開かれた。スタッフだけの打ち上げと違い、今回知り合った仲間たちも招待し、いろいろな出会い、プロジェクトの立ち上げ、





『災い—FUKUSHIMA の悲劇』
をハワイエで上映

今後の企画の打診など創造的な集まりになった。17日(日)映画祭2日目 初日はあいにくの強風と雨、2日目は寒かったが、多くのお客さまに来ていただいた。8回目の上映を終え、会場の学術交流会館の前で記念撮影。祭りが終わった後の一抹の寂しさを感じていたのは筆者だけではなくたろう。当初は大任のプレッシャーに潰されそうだったが、実際に動き出すと、涼しい顔で自分の仕

事後を淡々とこなす映サスタッフの姿に触れ、大船に乗った気持ちで当日を迎えることができた。ぜひこのチームでまた何かやりたいと思えたことが自分にとって一番大きな収穫だった。

最後に、ヴァルデックさんの2日目の舞台挨拶を引用して感謝の言葉に代えたい。「今回の原発の事故で私が感じたのは、文明と自然の対立です。文明はこれ以上先に進んでもいいか、という問いかけです。ひとは美を作り出すために自然の力を借ります。庭に花や樹木を植えるのもそのひとつです。それでは文明には美を生み出す力はないのでしょうか。映画は文明の側に属するものです。映像作家として私の試みは映画という文明の力を利用して人の中に美を創造することなのです。」

最後に、ヴァルデックさんの2日目の舞台挨拶を引用して感謝の言葉に代えたい。「今回の原発の事故で私が感じたのは、文明と自然の対立です。文明はこれ以上先に進んでもいいか、という問いかけです。ひとは美を作り出すために自然の力を借ります。庭に花や樹木を植えるのもそのひとつです。それでは文明には美を生み出す力はないのでしょうか。映画は文明の側に属するものです。映像作家として私の試みは映画という文明の力を利用して人の中に美を創造することなのです。」

ポーランドの心が広がる映画会を実感

栗原 朋友子

このたびの上映会《ポーランド現代映画セレクション 2004-2009》は、「札幌映画サークル」と「北海道ポーランド文化協会」の初めての共同作業として、駐日ポーランド共和国大使館の特別の協力があったて実現しました。札幌映画サークルは映画鑑賞団体として、こよなく映画を愛する方々が、老若男女、居住地を問わず、活動している団体だと聞きます。北海道ポーランド文化協会はポーランドと北海道の間の文化交流を促進することを目的とし、文学・歴史・美術・映画・音楽などポーランドの文化を幅広く愛する人々が結集した運動体です。この二つの団体のポーランドという国に関する理解度が異なるのは仕方のないことですが、今回の映画会はお互いの会の性格を理解した上で分担作業をした良い会だったと思います。

下準備を早くからして下さった札幌映画サークルの方々には心から感謝の意を表します。それに比べ、北海道ポーランド文化協会は運営委員の有志が当日のお手伝いをしたにすぎませんでした。

チケットもぎりを担当したポ文協の一員として特に印象に残ったことがあります。札幌在住のポーランド人のダニエルさん=写真下=が受付で来場者の一人一人にポーランド式に“Dzień dobry” “Proszę bardzo”と丁寧に声をかける紳士的なあいさつは、ポーランドを知らない人にも好印象を与えたことと思います。言語と文化の壁を越えて、映画を観る前に紳士淑女の国ポーランドの文化の一端を感じ取っていただけたのではないかと、ポーランドを愛するものとして嬉しく思いました。



受付担当
(後中央)ダニエルさん

深い感動を呼ぶ珠玉の名作ふたたび

柏木 由美子

『裏面』を見て、昔見たポーランド映画を思い出しました。映画のタイトルは忘れてしまいましたが、こんな内容でした。ある若い女性が身に覚えのな

い罪で逮捕され、投獄されました。長年の服役終了後、彼女は外の世界に連れ戻されますが、あるアパートの階段まで連れてこられて「ここがおまえ

の夫の家だ。夫と子供が待っている」と言われます。結婚したことも子供を産んだこともない彼女は怪訝そうな顔でそのアパートのドアを見つめる、というシーンで終わる映画でした。逮捕されたときは若く生き生きとしていた彼女ですが、服役後は眉間にしわが刻み込まれ、目はうつろで、失われた時間の重さを物語っています。社会体制に翻弄される運命を描いた映画は、いかにもポーランドらしいポーランド映画のように思えます。

『裏面』からも社会体制という巨大な怪物とそれを守ろうとする公安の冷たさ恐ろしさ、ささやかな幸せを懸命に守ろうとしている庶民の生活を垣間見ることができます。サビナと母親、祖母は特別裕福ではないけれど、日々の暮らしを丁寧に過ごしている。その中でサビナは硬貨を飲み込んで排出する。プロニスワフはなぜそれを知っていたのでしょうか。想像すると背筋が寒くなります。

妊娠してしまったサビナに対する母と祖母のセリフも印象的です。「愛情なんていつかなくなるけど、子供は産んでおけば後々心強い」といったような内容でした。人生の苦楽を味わい尽くした母と祖母の、なんて割り切った、したたかな考えでしょうか。

そうして生まれた子供が父親のプロニスワフにそっくりな息子で、しかし父親とは違いとでも優しく、さらに、父親が公安だったのに対して、息子はカトリックポーランドのタブーであるゲイだということにブラックユーモアを感じます。子供を産んで、社会体制の変化を経験し、サビナの人生はどんなだったのでしょうか。息子がこのように優しい人に育ったということは、サビナも母親としての幸せは味わったのだらうと想像します。サビナもその母や祖母同様したたかに自分の人生を送り、プロニスワフを殺したことは墓場まで持って行くのでしょう。

今回は上映された4本とも見せていただきました。『ぜったいにダメ!』、『あなた、嘘をつかないで』は、今までに見たことのない種類のポーランド映画でした。このような楽しい現代ポーランド映画を、是非また上映して下さい。4本の映画を自分の好みでおもしろかった順に勝手に順位をつけるとしたら、1位は『ぜったいにダメ!』=写真下右=、2位『あなた、嘘をつかないで』=写真下左=、3位『裏面』、4位『救世主広場』です。みなさんはどうでしたか。



〈筆者紹介〉20年ほど前までは、ショパンはフランスかどこかの人だったっけ?という程度の認識しかなく、ポーランドは私にとって白地図地域でした。そんな私が、1993年に青年海外協力隊の日本語教師としてポーランドに行く機会を得ました。同じ青年海外協力隊の、マレーシアでの日本語教師の仕事を終えて帰国し、仕事を探している時にポーランド行きのお話を目にして、「おもしろそう!」と飛びついたわけです。それがポーランドとの出会いで、帰国後ポ文協のことを知りました。



受付担当 (左端) 筆者

親愛なるバルデック・チェホフスキへ

霜田千代磨

昨2010年の3月に初対面で意気投合したバルデック・チェホフスキが(本書35ページ参照)、何の因縁か《ポーランド現代映画セレクション 2004-2009》に合わせて再度来道された。彼は今回ポーランドから東京へ来るや否や、在京のポーランド大使館の一等書記官ラデック君の運転で東北の震災地を訪ね、沢山のビデオ映画を撮ってきた。全く、ドキュメント映画監督としての魂には恐れ入る外ない。その昂奮さめやらぬエネルギーで北海道へのり込んできた。頭よ

り“ユゲ”が出ていた。当協会の配慮に依り急きよ次の様なスケジュールが組まれた。

4月14日朝9時半、チェホフスキ氏千歳空港着。佐光、氏間、札幌映画サークルの人が出迎え札幌を案内。午後3時30分、江別「ドラマシアターども」にて霜田合流。災害地のフラッシュ・フィルムを観せていただく。霜田と浅野由美子(美術家)の2人、墨で大紙4枚に「災い FUKUSHIMA の悲劇」と監督の要望により書く。明日のワークショップの準備、

映画上映中にロビーを飾る為。

4月15日午後5時30分、かでの2・7、510号室でワークショップを行う。大盛況。

4月16日午前11時、北大学術交流会館にて《ポーランド現代映画セレクション 2004-2009》上映。協賛の大使館のティシュキェビッチ一等書記官と特別ゲストのチェホフスキ氏が幕間の挨拶をする。この日、僕の観たポーランド映画では『裏面』、『救世主広場』に強いインパクトを覚えた。

終演後、全日空ホテルで大使館主催の「上映記念レセプション」が開催された。氏間さんの司会により、主催者ラデックさんの挨拶、当協会安藤会長から、一緒に実行委員会を構成した札幌映画サークルに対して謝辞があり、霜田の乾杯の音頭“ナズドロビェ”で祝宴が始まった。この日のパーティは札幌映画サークル関係者が多く盛り上がった。また、北大の井上名誉教授も出席され、ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキについてスピーチをされた。

バルデックは明日是非、小樽へ行ってみたいとの事で、来年ピウスツキの像を制作する人と、その友達の方に、車で案内してもらえないかと、あつましくも小生から頼み込んでみた。心よく、明日朝8時にホテルへ彼を迎えに行くと言ってくれた。これ

もバルデックの人徳か？後で聞くとところによれば、その日、小樽より戻り、午後3時よりレクチャーをもったとの事。この男のエネルギーは凄まじいと改めて感じ入った。

話は前後するが、パーティの後、私とパーティに来られていた一人の女性と、バルデックのホテルの部屋へ招かれた。結論はこうだ。次回彼が北海道へ来た時は登別の知里幸恵記念館を一緒にたずねる。そこでボクは墨象をする。彼女とバルデックと僕の3人でワークショップをすることが決まった。彼女は知里幸恵の詩集の英語版を次の日バルデックのホテルへとどけると約束してくれた。

…バルデックに色々な宿題を出され、そして別れた。Do zobaczenia (ドゾバチェニア)また会いましょう！



江別の「ドラマシアターども」で再会したバルデック（左）と筆者



大使館主催「上映会記念レセプション」映後、ボ文協など47人が参加。2011/4/16 全日空ホテルにて



談笑のなかの記念撮影



ポーランド国歌の合唱



観客のみなさんの声

(アンケートから)



フライヤー(左から)『裏面』、『救世主広場』、『ぜったいにダメ!』、『あなた、嘘をつかないで』

◆映画もワークショップもとても良かったです。自然と文明の問いかけ私も同感です。沢山の参加で驚きました。(70代、男性)

◆娘の話を聞き、昨年より少しずつポーランドに興味がありました。今、自分の信仰している宗教の知人もポーランドについて話してくれました。今度、本当に行ってみたいです。(50代、女性、R・O)

◆『裏面』はどうなるか先が読めずにワクワクした。女性の強さを感じた。(20代、男性)

◆全体にシリアスなものともコメディをとりまぜて良かった。『裏面』は過去の粛清の時代を、『救世主広場』は一番印象的だった。嫁・姑の問題、夫の浮気、ヒロインのこわれていくさまが痛々しかった。住宅問題や職の問題、この家族にお金があれば解決の糸口も、またこのように憎み合うことも傷つけあうこともなかったと思う。『あなた、嘘をつかないで』は美しい街並みが良かった。(60代、女性)

◆『あなた、嘘をつかないで』はコミカルな会話が素晴らしい。充分楽しめました。(60代、男性 Y・A)

◆とにかく素晴らしかったです。(50代、女性)

◆ポーランド劇映画祭グランプリを受賞した『裏面』(2009)よりあとの作品を観てみたいです。(40代、男性 T・T)

◆仕事を休んできました。とても良かったです。(50代、男性)

◆『救世主広場』は今まで見たことがない全く新しいタイプの映画で非常に良かった。(女性 S・W)

◆『裏面』の主役の演技スゴ! 感激しました。時代背景を知っていれば、もっと楽しめたかな…(20代、女性 I・S)

◆今後もポーランドなど諸外国の一般劇場での公開しない作品を見たい。(70代、男性)

◆Super!!! Bardzo もっとポーランド映画が観たいです。(20代、女性)

◆ハリウッド映画のようなチャライ内容に比べやはりヨーロッパ映画はいい。4本それぞれに味わい深いものがあり、ポーランド映画のイメージが新たになった。現代のポーランド映画の魅力が十分に伝わり映像・音楽が素晴らしい。(50代、女性)

◆『裏面』面白かったです。会場も座席にテーブルがあって良かったです。機会があればまた来たいです。(30代、女性)

◆『あなた、嘘をつかないで』はスタンダードだけど笑えてホロリでグー。『救世主広場』は後半「？」という部分があり…ちょっぴり欲求不満でしたが良かったです。(50代、女性 K・I)

◆我々が見てきた映画といえば、ワイダとかポランスキーとか。こういう『あなた、嘘をつかないで』のノーテンキな映画は楽しい。ロシア映画にもいえるが、ロシア、ポーランド文化の研究者は皆、きまじめなんでしょうね。(50代、男性)

◆『あなた、嘘をつかないで』はさわやかで清潔感のあるストーリー。冒頭のエメラルドグリーンと海とパープルの空でグイッとひきこまれた。(坂本さん、40代)

◆『裏面』は勝手な思い込みのイメージ通りの内容でよかった。『あなた、嘘をつかないで』のコメディで何となく救われたようです。横にいる人が信用できないことは恐ろしいですね。(60代、女性)

◆『裏面』とても面白い作品でした。講演も少しだけ聞くことができ、違う場所違う国のことも共感しながら見ることができる映像の力を改めて感じました。(20代、女性 E・N)

◆観られる機会のない作品を上映頂き、ありがとうございました。(30代、女性)

◆仏映画をしのぐラブコメディ。ポーランド映画もすてたものじゃない。(60代、男性)

◆ポーランドに暮らしたことがあるので、映画を見ていると色々なことを思い出しました。街並みもとてもなつかしく、充分楽しめました。本当にありがとうございます。(60代、女性 Y・O)

◆『裏面』は映像・音楽の組み合わせがシュール。(60代)

◆『ぜったいにダメ!』は最後の部分がものすごく良かったです。また、機会がありましたら見に来ます。よろしくお願いします。(酒井さん、30代)

札幌における「ポーランド映画セレクション」I～III一覧

POLAND ポーランド現代映画セレクション 2004-2009
音楽と歴史の国
戦火と受難を越えて
現代を見つめる眼差し

4月16日(土)～17日(日)
北大学術交流会館

4作品を道内初上映!

『救世主広場』(2006)105分、ヨアンナ・コス=クラウゼ、クシシユトフ・クラウゼ監督
『あなた、嘘をつかないで』(2008)100分、ピョトル・ヴェレシニャック監督

POLAND ポーランド映画セレクションII
いま注目の女流監督が“家族”を問う
—ドロタ・ケンジェジャフスカ監督—

5月5日(土)～6日(日)
北大学術交流会館

『木洩れ日の家で』(2007)104分、ドロタ・ケンジェジャフスカ監督
『僕がいない場所』(2005)98分、同上
『コヴァルスキ家の歴史』(2009)60分、アルカディウシュ・ゴウエンビエフスキ監督

POLAND ポーランド映画セレクションIII
傑作群、待望の札幌上映

6月8日(土)・9日(日)
札幌プラザ2・5

『沈黙の声』(1960)98分、カジミエシュ・クツツ監督
『エロイカ』(1957)87分、アンジェイ・ムンク監督
『愛される方法』(1963)97分、ヴォイチェフ・イエジー・ハス監督

名称	ポーランド現代映画セレクション 2004-2009(第55回例会)	ポーランド映画セレクションII (第60回例会)	ポーランド映画セレクションIII (第65回例会)
会期	2011年4月16-17日(土・日)	2012年5月5-6日(土・日)	2013年6月8-9日(土・日)
会場	北海道大学学術交流会館	北海道大学学術交流会館	札幌プラザ2・5
ゲスト	ラドスワフ・ティシキェヴィチ(駐日ポーランド大使館一等書記官) ヴァルデマル・チェホフスキ(ドキュメンタリー映画監督)	アルカディウシュ&カタジーナ・ゴウエンビエフスキ(映画監督) ヴァルデマル・チェホフスキ(ドキュメンタリー映画監督)	マチェイ・ドルィガス(映画作家) ヴィタ・ジェラケヴィチュテ(映像作家) 久山宏一(ポーランド語翻訳家・通訳)
上映作品	『ぜったいにダメ!』(2004)100分、リシャルト・ザトルスキ監督 『裏面』(2009)96分、ボリス・ランコシュ監督 『救世主広場』(2006)105分、ヨアンナ・コス=クラウゼ、クシシユトフ・クラウゼ監督 『あなた、嘘をつかないで』(2008)100分、ピョトル・ヴェレシニャック監督	『木洩れ日の家で』(2007)104分、ドロタ・ケンジェジャフスカ監督 『僕がいない場所』(2005)98分、同上 『コヴァルスキ家の歴史』(2009)60分、アルカディウシュ・ゴウエンビエフスキ監督、マチェイ・パヴァリツキ監督 『モルトケ』(2011)38分、ヴァルデマル・チェホフスキ監督 『世界の夜明けから夕暮れまで』(2011)ミンスク篇(39分)、キエフ篇(44分)、東京篇(40分)	『沈黙の声』(1960)98分、カジミエシュ・クツツ監督 『エロイカ』(1957)87分、アンジェイ・ムンク監督 『愛される方法』(1963)97分、ヴォイチェフ・イエジー・ハス監督 『サラゴサの写本』(1965)182分、ヴォイチェフ・イエジー・ハス監督 『夏の終わりの日』(1958)66分、タデウシュ・コンヴィツキ監督 『統合失調症』(2001)、ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督 『私の叫びを聞け』(1991)46分、マチェイ・ドルィガス監督
入場料(1本)	1,200円/1,000円/500円	1,200円/1,000円/500円	1,200円/1,000円/700円
入場者数	のべ約600人	のべ529人	のべ約400人
関連イベント	ワークショップ『ヴィンツェンスの足跡を追って』(57分)上映他 上映記念レセプション	ワークショップ 交流会	講演会 交流会

チェホフスキ監督と過ごした3日間

氏間 多伊子

ポーランド大使ロドヴィッチ女史からのプレゼント！ドキュメンタリー監督を派遣してくださったのだ。その人は深く美しい映像を携えてやってきた…。

ポーランド大使館に感謝！

昨2009年2月に第54回例会『カティンの森』の試写会の企画を提供してくださった駐日ポーランド大使館。劇場公開に先駆け、一等書記官のラデックさんの解説付きでとても充実した会だった。参加者の関心の高さは議論としても現れた。



また、今年2010年2月には「ポーランド・デーin札幌」(第3回定例)が開催され当協会の会員が招待された。「さっぽろ雪まつり」にあわせロドヴィッチ駐日大使がご来札され、イベントの一環で映画『ニキフォル—知られざる天才画家の肖像』の上映会があった。この映画の見所はクリスティーナ・フェルドマンという86歳の女優が「寡黙で頑固な男性画家」を演じていたことだが、全く不自然さを感じられない。孤高の画家だったニキフォル(1895-1968)の生涯を、ことさら劇的に描くわけでも、何かを激しく訴えるわけでもない。「こんな画家が、ここにいました」と、ポーランド南部の美しい自然を背景に、一幅の絵



鬼才ニキフォルの原画

のように静かに切り取る。観客はニキフォルが描いたキャンパスの中に、知らぬ間に入り込んだ気分になる。実在した人物像のもつ凄みとラストの曲は、とてもスラヴ的で気持ちを高めへ連れて行ってくれた。終わったあと数人で、狸小路の「コーシカ」でウォッカを舐め、ロシアン・ティーを飲みながら夜更けまで話しこんだ。

その翌月、ドキュメンタリーを数多く手がけている(www.procinema.plの創設者)ヴァルデマル・チェホフスキ監督が、2010年3月18-20日まで札幌を中心に収集・制作活動をおこなうために来札された。思いもかけない幸運に喜んで同行させていただいた。最初の2日間は北海道大学の情報科学研究科の教室でワークショップを開催した。10名ほど

の少人数だったせいもあるが、直に伝わってくる密度の高いものになった。

哲学者&作家ヴィンツェンスの足跡

脚本・監督・撮影すべてご自身による作品“By ways of Vincenz”(仮題:ヴィンツェンスの足跡を追って、57分)を上映した。ポーランドの作家&哲学者スタニスワフ・ヴィンツェンス(Stanislaw Vincenz, 1888-1971)を貴重な映像と周りの人の証言で綴ってゆくのだが、個性の強烈さとあまりの精神性の高さにビックリ。「古代賢者のようだった」とか「座る姿はソクラテス」と当時を語る人もいた。

作品は神と人のつながりの根源、ウクライナや、フツル文化の研究などが中心に描かれている。映画を通してわずかでもヴィンツェンスとの〈対話〉を追体験できるなら、エピクロスの子のように人生を経験し、享受できそうな気にさせられる。宗教も人種も多種多様が彼の至上の価値だったことが良くわかる。ヴィンツェンスは人生の大半は亡命者だった。晩年スイスに居を移す。「いつも山に惹かれていた」が、亡くなるまでフツルを忘れることなく懐かしんでいたことを周囲の人々の証言が物語る。しかし、亡命者の苦しみを背負うことなく、まったく逆に今いる場所に根を下ろしたひとでもあった。たぶん彼は欧州への帰属という問題を自ら解決したのではないかと思う。

フツル人とその文化

フツリシュチナはウクライナの山岳民族で「誇り高く勇敢な」フツル人の居住する地域。ここを舞台にした小説『忘れられた祖先の影』(ムィハーイロ・コツェブィーンシクィイ著)をもとに、セルゲイ・パラジャーノフによって邦題『火の馬』(1964)が映画化されている。フツル人は過去にも多くの作家や画家にインスピレーションを与え、その生活が詩や文学、絵画に描かれている。

長年にわたって受けてきた分割統治という不自然な行政区分にも拘らず、何世紀ものあいだ地域に共通する独自の伝統的秩序、山岳条件、生活様式、羊飼いの法、畜産業、物質面と精神面に及ぶ文化、方言が養成されたのは驚異的なことだ。

「彼らは極めて普遍的だ。そこに人間の実存的経験の精粹があるから。ヴァンツェンス作品は再構成と創造の間、注釈と創作の間にある、人間の祖国が描かれるのであり“天と地”“神と人の共同体”としてホメロスの扱った世界である」と作品の中で学者が語る。ヴァンツェンスの乳母はフツル人だったこともうなずける。

長きにわたる分割統治

1939年にナチス・ドイツとソ連がポーランドを分割したとき、ポーランド領だったフツルリシュチナは大部分がソ連領となる。戦後も1950年代後半まで武力闘争で多くの村がその犠牲となり、1991年にソ連から独立したウクライナの領土となった。この作品に闘争の映像はまったくないが、言葉からその輪郭もあぶり出される。「生の恍惚感」といえるようなものを感じるのは、なぜだろうか。恍惚感とは「生そのものへの衝動」へと移行する。深い感動が内面に迫ってくる。

他のポーランド作品

『タンズと二人の男』(1958)ポランスキー監督が在学中に撮った18分の短編も紹介してくれた。海から二人の男が大きいタンズを抱えて陸に上がって歩き回り、最後に海に帰っていくという不条理ともナンセンスとも映像詩ともいえる作品。また、Tomasz Bagiński氏の“Fallen Art”(英国アカデミー賞最優秀短編アニメーション)は、謎と驚きを盛りこんだ作品だった。

目の当たりにした制作活動

最後の日は、江別市の「ドラマシアターどもIV」を訪問した。れんが造り3階建て(1922年築)旧江別郵便局舎を、現在は民間小劇場・喫茶店に。ここでロ

ドヴィッチ大使の友人の霜田千代磨さんを監督に紹介した。霜田さんは寺山修司(天井棧敷主宰)の東欧公演のときサポートをされたポーランド通。

舞台ではアコースティックな伝承音楽、ブルースやジャズをやっている大学生がギター、マンドリン、フィドルやバンジョーを手にリハーサルをしていた。監督は階下の炊事場でも長い間カメラを回す。薪ストーブや珍しい道具にくぎづけになる。かなり古い磁器の湯のみ茶碗が気に入りわけていただく。

さらに水運が盛んな頃の倉庫群を利用したアールスペース「外輪船」へ。ホールのピアノをみつけると、すかさずショパンの曲を弾く。近くに流れる千歳川を映すため、監督は一気に急勾配の土手にかけてあがった。アイヌ文化にも興味を示され、近くに住んでいる方に連絡し語ってもらい撮影した。着眼が新鮮で、かつ物凄い集中力と行動の人だった。



ワークショップに参加したポーランドの留学生と監督(左端)、筆者(右2人目)

2009年、日本・ポーランド国交樹立90周年を迎えた。今年はショパン生誕200年で、5年に一度のショパン国際ピアノコンクールがある。ポーランドはワイダ、ポランスキー、キェシロフスキを生んだシネマ大国でもある。アンジェイ・ワイダ監督は新作『スウィート・ラッシュ』(英題)で若さと死の対比、取り返しのつかない喪失を描いたという。公開がとても楽しみだ。

第65回例会

Poland Film Selection

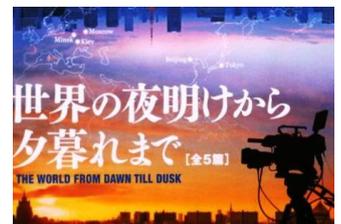
6月8日、9日

札幌プラザ2・5
(旧東宝プラザ)狸小路5丁目

世界を驚かせたドキュメンタリーの
問題作、札幌初上映・両監督来場!
マチェイ・ドルィガス監督/ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督



講演会+作品上映
「統合失調症」
「私の叫びを聞け」



ポーランド映画人による学生
ワークショップ&ドキュメン
タリー制作プロジェクト

2013年6月8-9日(土・日)の両日、《ポーランド映画セレクションⅢ》を開催。普段はなかなかご覧いただけないポーランド映画の名作・新作を札幌市民に見ていただく、この企画は今年で3回目になる。毎回延べ500~600人の観客を集め、日本全土でも例を見ない、大規模なポーランド文化紹介イベントになっている。

(第 65 回例会) ポーランド映画セレクションⅢ

ドリュィガス監督との出会い

久山 宏一

社会主義ポーランド 4 部作

『私の叫びを聞け』(1991)、『自由の声』(2002)、『ポーランド人民共和国の一日』(2005)、『他人の手紙』(2010)は、アーカイヴ映像を基に社会主義時代のポーランドを描き出した記録映画監督マチェイ・J・ドリュィガス(1956-)の4部作。いずれもモノクロ 1 時間弱の作品だ。「社会主義ポーランド」連作は、それぞれ異なった方法論で撮られ、「連続」しているというよりは、「断続」していると評するのがふさわしい。本 2013 年 5-6 月に日本で上映された第 1 作と第 4 作を例にとろう。『私の叫びを聞け』では、他人が撮影した素材は少ない(変容しながら繰り返し登場するので、尺にすれば、全体の3分の1ほどを占めるかもしれない)。その周辺を新たに撮られた証言映像・再現映像が取り囲んでいる。『他人の手紙』は大半がアーカイヴ映像で、再現映像(検閲官の作業を描いた部分)は 10%以下だろう。

米国国防総省の保管フィルムとニュース映像を編集して『東京裁判』(1983)を作り上げた小林正樹は、「膨大な素材を編集しているうちに、自分が演出して撮影したような気がしてきた」と述べたことがあったが、ドリュィガスは、アーカイヴ映像に対して、より批評的な距離を保っている。第 1 作では、細部の拡大、スローモーションなどによって、「他人の映像」を大胆に改変し、第 4 作では、朗読される手紙への直接的・間接的な挿画として奉仕させるところまで、主体性を奪ってしまった。

『世界の夜明けから夕暮れまで』

ポーランドが EU 議長国を務めた 2011 年下半期、ウッチ映画大学などで教鞭を執るポーランド記録映画監督たちがモスクワ、ミンスク、キエフ、北京、東京の映画大学学生を指導して、「都市の一日」を描く連作が作られた(2012 年 5 月に、北大学術交流会館で開かれた「ポーランド映画セレクションⅡ」では、そのうち「ミンスク」「キエフ」「東京」篇が上映された)。私はひょんなことから、東京篇の製作コーディネーター兼通訳を務めるめぐり合わせとなった。ワークショップの発案者は、ウッチ映画大学教授ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・J・ドリュィガス。日本映画学校・日本映画大学・日本大学の学生たちを指導し

たのは、初期ケシロフスキ作品のカメラマンだったヤツェク・ペトルイツキ、記録映画監督パヴェウ・ウォジンスキ、ワイダ監督の『カティンの森』(2007)の編集者ラファウ・リストパトの 3 人だった。

『私の叫びを聞け』の作者の面識を得たのは 2011 年 8 月、東京でのワークショップの後に滞在したワルシャワでのことである。こちらの話に熱心に耳を傾ける穏やかな紳士で、気難しい哲学者に違いない、という作品からの予想は快く裏切られた。

同年 12 月には日本映画大学で、『世界の夜明けから夕暮れまで』全 5 編+教官の作品 4 本の上映会が開かれた。マチェイ・ドリュィガスとヴィタ・ジェラケヴィチュテ(1959-)夫妻も長男アダムとともに日本にやってきた。マチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『壁の向こう側』も上映された。

紙幅の関係で、本稿では、リトアニア出身のヴィタ夫人の創作歴について詳述できないが、夫妻の創作はけっして同質ではない。マチェイ監督は、精密なシナリオを準備したうえで撮影・編集に挑むタイプ(最新作では手法を変化させている——後述)。

完成度の高いシークエンスを綿密に組み立てた嵌め絵のようなその作品は、有無を言わせぬ説得力を持つ。ヴィタ監督は、より息の長いナレーションを好むようだ。作品の最後には、カメラによって偶然捉えられた「落ち(下げ)」のような場面が据えられていることが多い。疑問符を突き付けられた観客は、己れの脳裏で映画を完結させる。こうした特徴は、夫妻が指導した『世界の夜明けから夕暮れまで』にも明らかだった。マチェイ監督のロシア篇がコラージュ的でやや冷たいのに対し、ヴィタ監督のウクライナ・中国篇は物語的でとても温かい。



『私の叫びを聞け』(1991)

さて、『私の叫びを聞け』が上映された直後のディスカッションで、佐藤忠男学長は「衝撃に言葉も出ない」と語り、天顔大介監督は「人間は死ぬまで人間だということを再確認した」と呟いた。私は、日本のプロの映画人に強い印象を与えたこの作品をもっと幅広い観客層に観ていただきたいと夢見るようになった。

2012年3月には東京・岩波ホールで『世界の夜明けから夕暮れまで』が一般公開され、その後ワルシャワを訪れた私はドルィガス監督と再会した。スタジオに案内され、リストパトが編集作業中の最新作『アブ・ハラズ』(2013)の冒頭シークエンスを見せてもらった。『他人の手紙』のDVDを受け取ったのもそのときである。

EU Film Days 2013

EU Film Days 2013で上映するポーランド作品選定を任されたときまず思い浮かんだのが、ドルィガスの「社会主義ポーランド」4部作の最初と最後の作品を合わせて102分のプログラムを組むことだった。夫人の招待も決まった。日本映画大学でシンポジウム「ポーランド記録映画の世界——ドルィガス夫妻を囲んで」が催されることになり、EU Film Days 2013との差別化を図るためもあって、プログラムはマチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『統合失調症』(2001)に固まった。北海道ポーランド文化協会のご厚意により、札幌「ポーランド映画セレクションⅢ」でも両作品が紹介されることになった。ウッチ映画大学教授を務めるドルィガス監督は、講演者としても類稀な才能を持つ。東京での計3回の上映後は、毎回1時間半に及ぶ質疑応答が交わされた。札幌では、劇場ロビーや懇親会が開かれた居酒屋、さらには移動の車の中でも議論が続いた。通訳としてこれほど働き甲斐のある日々は稀である。

ここでは一つだけ、新千歳空港に向かう車中で監督が語った『私の叫びを聞け』製作秘話をお伝えしよう——映画中には、ニュース映画カメラマンが写した、燃えるルイシャルト・シヴィエツを映した7秒間の映像がさまざまに変容して用いられている(初めは周辺の人物たちの反応に焦点が当てられ、ラストで本人が映る)。ところが映画完成後、監督は公安局員が撮影した別のフィルムを発見したというのだ。そこには、火を消された後も叫びつづけるシヴィエツが救急車に収容されるまでが記録されていた。しかし、監督は、編集前に「消火」の記録を見る機会

を持たなかったことを、特に残念とは感じなかったという。生前のシヴィエツが録音した音声による「遺書」の背景として、燃身の瞬間ほどふさわしいイメージはなかったからである。

この話を聞いて、私の脳裏に、さまざまな疑問が浮かんだ。シヴィエツは、焼身者が即死しないことを計算に入れていたのか？救急車の中でも、ミイラのように包帯巻きにされていた病院の中でも、力が続く限り叫びつづけたのか？何を？面会に現れた妻に何を話したのか？あるいは瀕死の彼は、もはや言葉を絞り出すこともできなかったのか？…と同時に、こうした問いがおおよそ無意味であることも理解した。なぜなら、焼身という行為そのものがシヴィエツの叫びだったからである。ドルィガスの映画によって、それは時空を超えて人々に届く——東京と札幌の観客にも。

今後への期待

私はドルィガス夫妻と同世代に属する。夫妻は1980年前後のモスクワ映画大学在学中に知り合って結婚している。私もそのころ、ロシア語とロシア文学に没頭していた。ドルィガスは、ワイダの『大理石の男』(1976)を観たい一心で、ワルシャワに里帰りしたという。私も、1980年に岩波ホールでこの映画に出会っていなければ、ポーランド語の勉強など始めていなかったかもしれない。

しかし、体制転換後四半世紀近くにドルィガスが成し遂げた業績を鑑みると、同時代人への共感はずいぶん変わる。坂を登るでも降るでもない、一貫して稜線を歩み続けるような仕事ぶりだ。ソ連の宇宙飛行士にインタビューを行った『無重力状態』(1994)を挟んで、社会主義ポーランド連作で計5つの山頂を制覇した後、『アブ・ハラズ』で、ポーランドの記録映画が伝統的に得意としてきた「カメラによる観察」手法を試みる。舞台はスーダン、ダムに沈んだ小村の住民の群像劇だ。

今夏、夫妻は、グルジア、モルドヴァ、アルメニアの映画大学学生のためのワークショップを開く。年末には、『世界の夜明けから夕暮れまで』『トビリシ』、『キシニョフ』、『エレヴァン』篇が観られるはずだ。その後、「最後の映画」として「鉄道で世界を旅する」映画を作る。これまでのすべての作品がそうだったように、製作には少なくとも4-5年はかかるだろう。監督引退後は、文筆に専念したい…ドルィガスは、滞日中にそう語っていた。



〈第 51 回例会〉映画上映会(シアターキノ)

『敬愛なるベートーヴェン』

～「第九」とアンナ、そしてポーランド派ホラント～



三浦 洋

新作の映画『敬愛なるベートーヴェン』(2006)は、制作国がイギリスとハンガリーですが、監督のアグニェシカ・ホラントはポーランド人の女性監督です。パンフレットには「アニエスカ・ホラント」と書かれています。ポーランド語の発音に従ってアグニェシカと書きます。

私はこの作品を昨 2007 年 11 月に試写会で見たのですが、まず理屈抜きに面白い映画です。ストーリーの骨格は、ベートーヴェンが交響曲第九番、つまり「第九」を初演する4日前に、アンナ・ホルツという 23 歳の女性が写譜役として音楽出版社からつかかわれるところから始まります。作曲の心得があるアンナは次第にベートーヴェンに意見をいう女性になってゆき、「第九」の初演を助ける、という展開です。映画のクライマックスは、アンナの助けを借りてベートーヴェンが「第九」初演を指揮するシーンです。この筋書きはほとんどフィクションのようで、アンナは架空の女性ですが、「第九」の写譜師は三人おりまして、その三人目の人物は未だに謎なのだそうで、ホラントはそこに目をつけ、アンナという女性を造形したようです。

では、実際の「第九」初演はどうだったのかといえますと、ベートーヴェンの研究者であった山根銀二の著書によれば、難聴ゆえに演奏終了に気付かなかったベートーヴェンを客席に振り向かせたのはウンガーという女性歌手だったそうです。しかし、この映画ではこの女性をアンナに変えて、思いもよらない面白い物語を作ってみせてくれます。

さて、ここからが本題ですが、この映画は三つの見方ができるのではないかと思います。一つには、「第九」を中心に晩年のベートーヴェンを描いた映画という見方、二つめには作曲家を目指すヒロイン、アンナを描いたストーリーという見方、そして三番目には、アグニェシカ・ホラントが女性映画監督として、また、現代映画のポーランド派としての誇りをかけて撮った作品という見方です。

1. ベートーヴェンの人物像と晩年の作風

一つめの、ベートーヴェンを描いた映画という点では、1994 年にアメリカで制作された『不滅の恋ベ

ートーヴェン』と比べることができます。二つの映画の共通点は、ベートーヴェンを聖人君子扱いせず、俗人としてといますか、むしろ変人として描いている点です。果たして本当のベートーヴェンはどんな人だったのか、正確には誰もわからないわけですが、『敬愛なるベートーヴェン』では、芸術家の魂と俗人ぶりを併せ持つ人物をエド・ハリスが見事に演じています。ハリスはもともとスマートな俳優ですが、ベートーヴェンの役を演じるためにわざわざ特別の食事をつづけて太り、その上でピアノ、ヴァイオリン、指揮、楽譜を書く練習までして撮影にのぞんだそうです。ホラントの映画には何度も出演しているハリスですが、ひとときわ力のこもった演技になっています。

それから、ベートーヴェンの音楽という点では、『不滅の恋』のほうでは名曲のオンパレードという感じだったのに対し、『敬愛なるベートーヴェン』のほうでは「第九」以外に、ベートーヴェンが最晩年に作った風変わりな作品がエピソードをまじえて演奏されます。たとえば、最後のピアノソナタ第 32 番や、とても長いフーガを持つ弦楽四重奏曲第 13 番、七つの楽章がつづいて演奏される第 14 番などが映画に出てきます。これらの作品は初演の時から決して評判がよくなく、変わった作品とされていたようで、ロシアの作家オドエフスキーが「ベートーヴェンの最後の弦楽四重奏曲」という短編の中で取り上げています。実は、この短編が含まれている『ロシアの夜(ルースカヤ・ノーチ)』という短編集を、私は学生時代に故・灰谷慶三先生のご指導を受け、ロシア語で読んだことがあります。そのとき特に印象に残ったのは、オドエフスキーがベートーヴェンになり変わって、「悲しければ悲しいほど、私は減七の和音を付け加えたいのです」という台詞を書いていたことです。音楽にくわしかったオドエフスキーは、当時なかなか理解されなかったベートーヴェン晩年の作風を作曲家になりかわって説明してくれているわけです。映画の中ではベートーヴェンが作品を酷評されるシーンもでてきますが、晩年の作風について考えるヒントを与えてくれます。

そして、もう一つ、映画の軸になっているのが、

ベートーヴェンが溺愛していた甥のカールとの関係です。甥のカールとは、ベートーヴェンの弟カール(名前が同じなのでややこしいのですが)の子どもです。ベートーヴェンは弟が亡くなったときに、弟の妻であった女性と4年にわたる裁判までして甥のカールを奪い合いました。結局、裁判ではベートーヴェンが勝ち、カールを引き取ったのですが、カールとベートーヴェンの関係は決して良くなく不和がつづきました。この事実がストーリーに巧みに盛り込まれています。

2. 作曲家を志す女性、アンナの魅力

さて、今度は二つめの、アンナを描いた映画という見方についてお話しします。おそらくアンナはまったく架空の女性ですが、映画の中ではとてもリアリティのある存在です。とくに忘れられないのが、ベートーヴェンがアンナに対して「女が作曲するなんて犬が逆立ちして歩くようなものだ」というシーンや、アンナが「私は乳母や掃除婦や売春婦によくまらぐえられる」と叫んで、悔しさを訴えるシーンです。作曲の才能をもったアンナにとって、女性がさげすまれる社会状況は耐え難いものであり、この映画の随所にフェミニズムのまなざしが感じられます。

実際、クラシック音楽の歴史の中では、マーラーの妻アルマやメンデルスゾーンの姉ファニーらが、作曲の才能を持ちながらも女性であるゆえに認められにくかったといわれています。日本でも作家、幸田露伴の妹・幸田延が困難な人生を歩んだといわれます。

しかし、この映画は決してフェミニズムを声高に叫ぶ作品ではなく、アンナの姿は理想化されていません。アンナは作曲家になりたいと願いつつも生き方に迷い、なかなか主体的に人生を切り開いていきません。そんな彼女の姿にもどかしさを覚える方もおられると思いますが、私はここに、ホラントがポーランドの映画監督、グシユトフ・ザヌーシから受けた影響を感じます。ザヌーシの映画たとえば『太陽の年』や『巨人と青年』には逆らえない運命の中に生きる人物たちが出てきますが、このようなザヌーシ的な視点をホラントは保持しつつ、アンナに限りない共感をこめて描いているように思います。

少々話が難しくなりましたが、私はダイアン・クルーガー演ずるアンナという女性が実に魅力的に感じられます。アンナはドイツ人という設定ですが、知的で誇り高く、勤勉で、しかもチャーミングな彼女こそポーランド人女性の典型にみえます。ポーランド人に比較的多い「アンナ」という名前が彼女に与えられていることにも起因するかもしれません。

ここで、キュリー夫人を挙げますと、彼女はポーランド人で、本名をマリア・スクウォドフスカといいます。大変勤勉で魅力的な女性だったそうで、私にはアンナとキュリー夫人ことマリアがだぶってみえます。たまたまこの1ヵ月ほど新聞に「ポロニウム」という物質がまるで毒薬のように書かれています。この「ポロ」というのはポーランドのことで、発見したキュリー夫人ことマリア・スクウォドフスカが祖国ポーランドにちなんでつけた名前なのです。ポーランド人びいきの見方をしますと、貧困の中で研究に打ち込み、女性として初めてノーベル賞を受賞したキュリー夫人の姿こそ、ホラントがアンナを造形した遠いモデルになっている気がします。

その意味で、この映画は女性監督のホラントが女性の誇りを描いた映画といえます。ホラントは『太陽と月にそむいて』(1995)という作品で詩人ランポーとベルレーヌを描きましたので、芸術家をあつかった作品という点で連作にみえますが、今回のストーリーはヒロインのアンナにかなりの比重がありますので、そこが違いといえます。

3. ホラントのポーランド派らしさ

さて、ホラントの映画という三番目の見方に移りますと、アグニェシカ・ホラントは長らく脚本家としてポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダとともに作品を世に送ってきた人です。たとえば『ダントン』(1982)、『ドイツの恋』(1983)、『悪霊』(1987)など、「連帯」運動でポーランドが目ざされていた80年代の作品がそうです。

ポーランドはショパンに代表される音楽の国であるとともに映画大学をもつほどの映画の国でもあり、カヴァレロヴィチ、ポランスキ、ケシロフスキ、ザヌーシなど名立たる映画監督を多数輩出してきました。それは、ポーランドがルネサンス以来、演劇を発展させてきた国であり、名優を生んできた歴史が映画に受け継がれているからです。ショパンが学んだ音楽学校も前身は演劇学校の音楽部門でした。ポーランドでは、演劇を母とする映画と音楽は双子の生まれということになります。

ホラントはハリウッドやフランスでも映画を制作している人ですが、ポーランド派の映画監督だと実感される理由がいくつかあります。

一つは先ほど運命論の話をしましたザヌーシからの影響です。ザヌーシの『巨人と青年』という作品では老作曲家と音楽学生が夢を通して不思議な出会い方をしますが、どこかベートーヴェンとアンナの出会いに似ていますので、『敬愛なるベートーヴェン』のヒントになっているのかなという気がします。

また、状況を想像させながら登場人物をうつしだしていく手法はワイダの映像を想起させます。

このようなことからホラントをポーランド派の映画監督と考えますと、一つ興味深いことがいえます。それは、ポーランド人がドイツの芸術家ベートーヴェンをたたえた作品をつくったということです。一見なんでもないことのようにですが、ご承知のように第二次世界大戦はナチス・ドイツがポーランドに侵攻したときから始まったわけで、それ以前の歴史においてもポーランドはドイツから侵略を受けていましたので両国の関係は歴史的には良好ではありません。ベートーヴェンの「第九」にしても、ナチスが国威発揚の機会に好んで演奏した音楽でした。したがって、ベートーヴェンやドイツをたたえるのはポーランド人にとってタブーのような雰囲気があり、私の知る範囲でも、たとえばショパンがベートーヴェンやシューベルトから影響を受けていることを主張するのはタブーのような雰囲気が 20 世紀のショパン研究にはあります。それを考えますと、ベートーヴェンを描いたこの映画はポーランド派にとって画期的でもあります。

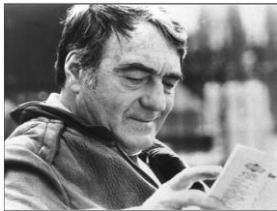
ちょうど今年ドイツでノーベル賞作家のギュンター・グラスがナチス親衛隊に属していたことを告白し(8月 12 日)、元ポーランド大統領のワレサ氏がグラスの「グダニスク名誉市民」称号剥奪に一時動

いて話題になりました。グラスの母親はポーランドの少数民族カシューブ人で、映画にもなった小説『ブリキの太鼓』の舞台は、「ダンツィヒ」と呼ばれていた頃のグダニスクです。グラスの例が示すように、隣の国でありながらも複雑な関係を持つポーランドとドイツを念頭におきますと、この『敬愛なるベートーヴェン』は、少し大げさですが、両国の今後の関係を予感させる作品なのかもしれません。

もう一度、話をワイダに戻しますと、ワイダとホラントの関係は、ちょうどベートーヴェンとアンナの関係に重なっても見えます。アンナが「私はベートーヴェンに仕えているのではなく、共同制作しているのです」と誇らしげに語るせりふは、ホラント自身のせりふとして受け止めるとき実感がこもっています。

何よりも、ホラントがワイダやポーランド派の流れをくむ監督であることを示す映像が冒頭にてできます。それは、「白い馬」です。ワイダのファンの方ならすぐに、あ、あの白い馬だ、と気づかれると思います。古くはワイダの名作『灰とダイヤモンド』にも、そして一番新しくは『パン・タデウシ物語』にも出てくる白い馬が『敬愛なるベートーヴェン』にも出てきます。この白い馬はポーランドの象徴で、ホラントは意識的に冒頭で白い馬を使い、ポーランド派として名乗りを上げているのにちがひありません。

クロード・ランズマン



『ショアー』のランズマンから見た

ワイダの『コルチャック先生』と

ホラントの『僕を愛したふたつの国』

小原 雅俊

かつて、ワルシャワ・ゲットーに閉じ込められた 200 人の孤児たちとともにトレブリンカの絶滅収容所で殺されていったヤヌシュ・コルチャックを描いたアンジェイ・ワイダの 1999 年カンヌ映画祭出品作品『コルチャック先生』に対して、翌年、フランスのユダヤ系知識人の間で、「記憶の帝国主義」「キリスト教による私物化」といった批判が投げかけられた。映画の幼い少年の頭上に現れるキリスト教の図像である光輪とキリストの贖罪と天国の比喩と解された映画の最後のシーン——トレブリンカに向かう輸送列車からコルチャックと子供たちを乗せた車両が離れ、スピードを落とし、草原で停まり、子供たちは、表に

ダビデの星が、裏に四つ葉のクローバーが描かれた旗を掲げて、まるでピクニックに来たのでもあるかのように嬉々として靄のかかった草原に駆け出すのである¹⁾。もちろん、字幕では彼らがどのようにして殺されていったかが伝えられる——が、ワイダがコルチャックを、ユダヤ人を救うキリスト教の聖者として描いたと非難される主たる根拠となったようである。

映画『ショアー』の監督クロード・ランズマンも *Sommaire* 誌の対談の中で²⁾、ワイダの『コルチャック先生』は「悪意ある反ユダヤ主義的な映画だ」と激しく非難した。ランズマンはここでも、ユダヤ人の絶滅には、最後のシーンで語られるような慰めはな

いこと、ユダヤ人全体の歴史を語るべきであって、ワイダのように個人的な物語を語り、それに普遍的価値を与えることはユダヤ人の歴史全体を歪めるものであるという主張を行っている。さらに、『コルチャック先生』のシナリオを担当したアグニェシュカ・ホラントについて、「嫌悪すべき映画『僕を愛したふたつの国(原題<ヨーロッパ、ヨーロッパ>)』を作った人間、と切り捨てて一方、ワイダはポーランド人のためのポーランド映画を作ったと言っているが、それならポーランドの中に留めておくべきで国の外に出す必要はないこと、コルチャックというポーランド化したユダヤ人はポーランド人にとってよいユダヤ人であるが、これからはワイダのおかげで、ユダヤ人にとってよいポーランド人になる、とも述べている。

ヤン・シチギェルのフランスでの『コルチャック先生』封切りの際の反応を紹介した記事によれば³⁾、この草原の寓意の中に「ワイダは焼却炉の存在を否定しているのだ」といった“歴史修正主義”の立場を見るような馬鹿げた解釈は一笑に付され、観客の中に(哲学者、エッセイストの Alain Finkielkraut が言うように)「ユダヤ人は車で町の郊外にピクニックに出かけたのだと思って映画館を出た者はまさかおるまい」が、ワイダの結末のメタファーはやはり「キリスト教による私物化のための操作」のひとつと見なされたのであった。さらに、シチギェルは、子供の頭上に現れる光輪についてはコルチャック自身が『ゲッター日記』の中で触れていることであり、「コルチャックはやはり、ポーランドのユダヤ人だったのだ」との感慨を付け加えている。

ランズマンが、先の対談の中で激しい口調で、ポーランドには反ユダヤ主義はなかった、と語ったというワイダに、ユダヤ人を助けたポーランド人がいたことは確かだがそれはごくわずかでしかなかったポーランド人に、さらにはユダヤ人を救えたであろうに救わなかったポーランド人を意味するコルチャック、孤児院で子供たちにイディッシュ語を禁じ、ポーランド語しか話させなかったコルチャックのようなユダヤ人にも向けられている非難と、彼が自らの映画『ショアー』で作り出したユダヤ民族の絶滅を証言するための方法、「表象不可能なホロコーストの表象」の問題が深く関わっていることは疑いない。

にもかかわらず、ここで取り上げられた多くのことからは、今ようやく、ホロコーストの残虐の歴史と分かちがたく結びついた問題として認識されるようになり、一方でそれに対する激しい反発、拒絶反応をも再生産しながら、研究が開始されたばかりであることも確かである。この対談で、ランズマンは、ワイダはコルチャックという英雄的なユダヤ人を描く

一方で、ユダヤ人の恐怖は放り出している、それがポーランド人の真実とユダヤ人の真実の完全なずれなのだと語っているが、アウシュヴィッツ=ビルケナウがユダヤ人にとっては絶滅収容所であったのに対して、ポーランド人にとっては強制収容所であった事実が、自明の事柄として語り出せたのもつい最近のことではないのも現実である。

ひとりの「コルチャック」が生まれてくるまでには、ポーランド人とそのポーランドで何世紀にもわたってポーランド人とともに暮らしてきたポーランド・ユダヤ人の長い歴史がある。「西のユダヤ人が自分たちが暮らしていた国々の国民と融合することを願ったとすれば、東のユダヤ人は自らを別個の運命と別個の特質を持った別個の民族と感じていた」し、まわりのポーランド人からもそのように受け取られていた、とポーランドへの同化ユダヤ人である免疫学の権威であったルドヴィク・ヒルシュフェルトは自伝『ひとつの生の物語』の中で書いている⁴⁾。

「私はひとつ屋根の下で、二つの極端な社会構造が仲睦まじく、幸せに暮らすのを見てきた」、「祈りともに目覚め、祈りとともに眠りにつく」日々を送っていた敬虔なユダヤ人たち、と1986年に出たエッセイ集『デザート溢れるクラコフスキェ・プシエドミエシチュ』の中に書いたのは、アウシュヴィッツ後のポーランド文学の担い手のひとり、同化ユダヤ人作家のアドルフ・ルドニツキであった⁵⁾。ルドニツキが語っているのは、「絶滅」によってポーランドの土地から、ポーランドの風景から完全に消え去り、今や記憶からも失われようとしている、主としてポーランドで、部分的には「絶滅」まで生きていた東方ユダヤ人の宗教共同体の人々のことである。

言い換えれば、ポーランドの閉ざされたゲッターを生きたユダヤ人とは主としてこの敬虔なユダヤ人たちとポーランド社会の中に同化したユダヤ系ポーランド人、あるいは宗教共同体に根を持ちながらポーランド文化の担い手になろうとしていた、いわば同化へと向かっていたユダヤ人であったことも忘れてはなるまい。長い間、三国の分割占領下にあったポーランドでは西欧とは異なり、ユダヤ人解放が法制的に実現するのはようやく第一次世界大戦後の独立に伴ってのことである。ルドニツキが語るユダヤ人とは、すでに崩壊を遂げつつあったとはいえ、地方のユダヤ人集住地シュテットルで西欧のユダヤ人とは異なる独特の暮らしを営んでいたポーランド・ユダヤ人のことである。

確かに、ワイダの映画からは、こうしたワルシャワ・ゲッターに閉じ込められたユダヤ人がどのようなユダヤ人から成っていたかの説明は得られないだ

けに、“ユダヤ人一般”以外そこに見ることが出来ないかもしれない。しかし、ワルシャワ・ゲットーに強制移住させられ、閉じ込められた人々ひとりひとりに、それまでの生活があり、人間関係があり、歴史があり、閉じ込められた後もなお暫くは、それまでの習慣や価値観を携えて暮らすことになったのであった。閉ざされた過密な空間の中で、極度の飢えと病気に苦しみ、一切の希望を閉ざされ、ナチス・ドイツのテロに対する激しい恐怖におののきながら、トレ布林カへ移送されるまで、そしてその後も、驚くほどの抵抗の末に鎮圧されたワルシャワ・ゲットー蜂起のときまで、なおも生きたことも記憶に留められなければならない。そして、ポーランド人の無関心あるいは「悪意」によって生き残ることが出来なかった人々の生も、たとえ僅かであれ、ポーランド人の手助けで生き残ったゲットーのユダヤ人のその後の生もまた、ホロコーストの記憶の一部に留められなければならない。

ポーランドの現代史の「語られない」部分を成功作も失敗作も含めて映像で表現してきたワイダにとって、まさに「ポーランド人のために」このテーマに取り組む必要があったのに違いない。それは、最初に触れたイエジ・アンジェイエフスキ原作のワルシャワ・ゲットー蜂起の時の塙の外側のポーランド人のユダヤ人に対する関係を描いた『聖週間』⁶⁾をワイダがまもなく映像化したことから推測できよう。この映画もまた、時代に敏感なワイダの触覚の中に反ユダヤ主義の非難を招きかねない危うさを蔵しているかもしれないし、あるいは自らの反ユダヤ主義を免罪しようとするポーランド人のための映画だ、との非難が起こるかも知れないにしても、である。

(この原稿は2001年11月に大東文化大学での講義資料としてまとめたものである。ここで取り上げたいいくつかの論点がこの先どのような展開を見せるかに興味があったためしばらく発表を控えていたものである。ユダヤ人とポーランド人の関係の歴史については今や膨大な文献があり、整理するだけでも容易でないが、機会を見て紹介してみたいものである。)

- 1) この場面はコルチャックが子供たちに死に備えさせるためにゲットーの中の孤児院で上演させたタゴールの戯曲『郵便配達人』の翻案である。
- 2) Sommaire, Numéro 1367. Du 17 au 23 janvier 1991, pp.70-73. 寺門祐子訳。
- 3) 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人——『コルチャック先生』を観て」『図書』1991.11、岩波書店。この引用はほとんどが次のヤン・シチギェルの記事による。Jan Szczygiel, *Święty bez aureoli* Polityka, 26.1.1991.
- 4) Ludwik Hirszfild, *Historia jednego życia*, Spółdzielnia Wydawnicza Czytelnik. Warszawa 1946; 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人」『大東文化』1989.12.
- 5) Adolf Rudnicki, *Krakowskie Przedmieście pełne deserów*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1986; 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人」『大東文化』1989.12.
- 6) アンジェイエフスキ[、イエジュイ]著「聖週間」吉上昭三訳(『東欧の文学 パサジェルカ<女船客>他』所収、恒文社、1966)



—2012 コルチャック年 特別記念企画— コルチャック先生の遺してくれたくれたもの

講演／展示会／映像上映／新刊書籍紹介

講演「子どもの発見と教育改革」

塚本 智宏

2012年11月20日、札幌では、W.タイス・ワルシャワ大学教授の講演(佐光伸一さんの通訳)、映画『コルチャック先生』の上映、コルチャックの子どもの権利思想に関する展示、塚本のコルチャック先生の「最後の行進」に関する小講演、という具合で

今から考えれば欲張りな企画でした。とくに展示はその準備などには協会のみなさまの応援があってようやく実現に至りました。映画・講演・展示などそれぞれにご感想・ご意見などたくさんありそうでしたが現状でなお把握しておらず、今後のためにも何

かお声をお寄せいただけるとさいわいです。

翌々日は東京、ポーランド大使館で同様に講演¹⁾と展示などがありました。会場は埼玉大学の小田倉いずみ先生(コルチャック研究者)の大学学生のボランティアの応援のもと、ビデオ上映企画で同先生がイスラエルから持ち帰ったコルチャック先生の教え子(高齢)の方の「コルチャック先生」についてのお話も興味深かったです。私は簡単な報告をさせていただいた他、展示の写真を見ながらポーランド大使にコルチャックとはどのような人物だったのかをお話する機会に恵まれました。そのほか、講演終了後タイス先生やコルチャック協会関係者が当日参加者とお茶菓子を介しながらの懇親会も有益でした。様々な婦人団体や教会、また人権団体の方などと現在の子どもたちや福祉の問題などに関連したお話で勉強の機会となりました。

- 1) なお、タイス先生のご講演については、東京での講演を塚本が勤務する大学の紀要に記録として残しましたので、入手されたい方はご連絡ください。紀要の抜き刷りをさしあげます。(講演記録:W. タイス・ワルシャワ大学教授「子どもは人間—コルチャックの教育遺産—」の紹介によせて、東海大学国際文化学部紀要、第5号)



講演するタイス教授

さて、国内でのイベントの後、世界各地のコルチャック年行事のいわば締めくくりとして、12月4-6日ワルシャワにて国際会議が開催され、参加してまいりました。関連イベントとして簡単にご報告します。

この会議の主催者はポーランド政府子どもの権利オンブズマンで、現在その長官は若く42歳のマレク・ミハラック氏(タイス先生のパートナー・バルバラ・タイス先生の教え子)です。

▼ 12月4日は、旧大統領官邸の比較的小さな講堂のようなところで80名くらいの国内外の研究者が集まり、「子どもの尊重される権利—1世紀の挑戦」と題して、朝から晩まで報告が続きました。塚本は日本の子どもの(権利)状況とコルチャック思想に注目する理由というような内容で報告。参加者のなかにはずっとコルチャックに関心を持ち続けているヨーロッパ人権委員会代表のトーマス・ハンマーベリイ氏もおり、日本の教育問題にも耳を傾けていただきました。



コルチャック先生と子どもたち (1930年頃)

▼ 5日は、ポーランド国内の子どもの擁護・保護するためのNGO諸組織の報告、コルチャックに関する新作オペラ公演や記念式典に参加。そこではシュピルマン夫人にもお会いしました。

▼ 6日は、世界のコルチャック協会の代表が、開設200周年を迎え新装オープンなったクロフマルナ孤児院の記念施設に集い、意見交換・交流が行われました(この日は不参加)。

ポーランドでは2012コルチャック年を記念してポスターコンテストが行われたようです(テーマ:そこにいるのは子どもではない。人間だ)。その受賞作である、子どもの手と大人の手をあわせた公式ポスター=写真右下=がとても気に入りましたので、報告の最後に掲載させていただきます。

“Dziecko to człowiek”



充実したパネル展に感嘆の声も



パネル会場風景
塚本先生の解説に熱心に耳を傾ける参加者たち



2012 コルチャック年記念
ポスターコンテスト受賞作

〈ポーランドの都市の伝説～トルン 1〉

トルンの町の名の起こり

何百年も前の昔のこと、ヴィスワ川の曲がりくねった所に町が建ちました。町の住民たちは、川の流れの湾曲部での急激な変化がもたらす危険を恐れ、安全な状態で暮らせることを切に願っていました。それで町を城壁と塔で囲んで護ることになりました。

建てられた塔のうちの 하나가、自分のそばを流れる川と話をすることが好きになりました。

「大好きなヴィスワさん、わたしはあなたがうらやましいわ！ あなたは山々を通り過ぎ、谷間を通り過ぎ、町々や村々を通り過ぎて海に注ぐまで流れてゆくのに、わたしはここに立ったままで退屈しているのよ」と哀れな塔は話しました。

「それは本当ね。わたしはあなたに同情するわ。わたしは面白い場所ばかり眺めているから、一度も退屈したことなんかないわ」とヴィスワは答えました。

多くの時間が流れました。ヴィスワの生活はますます楽しくなってきました。川は途中で見たことをいつも塔に話して聞かせました。しかし、まもなく塔は

自分の友達の話聞くことを喜ばなくなりました。塔は川に、話を止めてくれるように、頼みました。しかしヴィスワは塔に無理やり自分の話を聞かせようとしました。それでヴィスワ川の波はますます強く塔の外壁を洗いました。塔は傾きはじめました。

「ヴィスワさん、止めて！ 止めて！ 倒れちゃうよ！（ルネン runę）」捨て鉢になって塔は叫びました。

「ならば、倒れよ！（ト、ルン To ruń）」とヴィスワは答えました。

ちょうどその時、二人の商人が旅をして町に近づいてきました。遠くから町の城壁と塔が見えました。

「あれは何という町なのだろうね？」と二人は興味をもって、尋ねるように、口をそろえて言いました。

「ト、ルン！（ならば、倒れよ！）」というヴィスワの言葉がこだまとなって二人の耳に響きました。

「トルンだとき」

こうして「トルン」がこの町の名となりました。

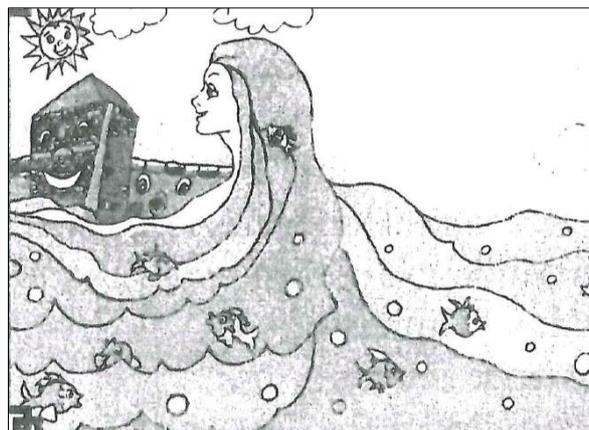
* * *

Toruń(トルン)の町名の起源を説明する民衆による民間語源説です。

「ト to」は「それならば」という意味の接続詞、「ルン(ルニ) ruń」は「ルノンチ runąc 倒れる」という動詞の命令形(2人称単数)です。

「ヴィスワ川 Rzeka Wisła」、「塔 baszta」は共に女性名詞で、擬人化されると女性になります。

栗原 成郎



ヴィスワ川とトルンの城壁の塔
 Legendy Toruńskie, «Literat»,
 Toruń, 2007 より